けったいな人びと（一）

茂

けったいな人びと（一）

茂木草介

日本放送出版協会

検印廃止

けったいな人びと（一）

定価 五八〇円

昭和四十八年七月五日 第一刷

著者 茂木草介

発行者 浅沼博

印刷 凸版印刷株式会社
製本

発行所 日本放送出版協会
東京都渋谷区宇田川町四一一一
郵便番号一五〇

（落丁本・乱丁本はお取替いたします）

©1973 Sōsuke Mogi

0093—005016—6023

けったいな人びと（一）　目次

宵待ち草　五
黒い影　一六
春の天気図　一三九
風立つ　一九九
冬へ……　二五二
坂道　二九九

題字

裝幀

加藤義明

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

けったいな人びと（一）

宵待ち草

一

大阪市西区、西横堀の西に、美しい公園がある。

ビジネス街の昼休みには、若いサラリーマンたちがここを憩いの広場として利用し、ある者は恋を語り、ある者はいかにして上役を籠絡するか秘策を練り、ある者は何も考えないような顔つきで、実は将来に厖大な夢を描いている……そうした場所である。

ところでさて、そこにたむろする若者たちに、もし次の質問を試みたとして、果してどのような答えが返って来るだろうか？

――失礼ですが、あなた、この公園の名前をご存知ですか。

「ええ。靱公園」

――いつもいらっしゃるんですか。

「ええ、まあ時々。会社の昼休みにはよく来ます。晩にも時々……」

――晩には、お一人で？

「いや、ガールフレンドと……静かなええ場所ですから」

――そうですね。ところであなた、ここが公園になるまでは、何だったかご存知ですか。

「知りまへん」

――そちらの、あなたは？

「……」

多分、十中八九、こんな返答が返って来るに違いない。

たまに訳け知り顔のがいて、

「以前、公園になる前は、この辺り一帯に進駐軍の兵舎があったンと違いますか？」

などと答える者があったとしても、

――では、その前は？

と、問い詰めると、たちまち小首を傾げて、黙り込んでしまう。

左様。たしかに以前、ここは進駐軍の兵舎跡であった。だがその以前は戦災の焼跡であり、更にその以前、ここに多くの海産物問屋が軒を並べて犇めき合っていたなぞ、知っている若者はまずあるまい。ましてやそこに〝大槌〟の屋号を持った老舗があったなぞ、例え噂にでも聞いたことのある者は、これはもう、皆無に等しいと言っても過言ではないだろう。

平太郎（当時、六十才）は、その靭の海産物問屋〝大槌〟の三代目の当主であった。

彼は産をなすために、暗くもに働いた前二代とは違って、反動的な怠け者であった。

毎朝十時過ぎに目を覚ますと、嗽、洗顔を床の中ですませる。十年前に腎臓を患って、半年ばかり寝込んで以来の習慣である。

洗顔がすむと、今度はヒゲの手入れに移る。

まず、ヒゲの袋をヒゲから外す。ヒゲは約一米、三尺三寸だと本人は言うが、実際はその半

分だろう。しかし、長いことは確かに長い。そのヒゲに水油をすりこみ、櫛で削り、ブラシをかける。

平太郎が自分ですることと言えば、このヒゲの手入れと食事の箸を持つことくらいであった。

「わて……年が明けたら一ぺん、サトへ帰らして貰います」

平太郎のヒゲの手入れが終わるのを待って、妻のふさが、いつものふくれ面で、ぽそっと言った。

彼女、五十三才。九条新田の大地主の娘で、気位が高い。

十八才で嫁いで三人の娘と、もう一人、ぐうたらな男の子を生んだ。

「あんたは若い時から、なんぞ気にいらんことがあると、じきにサトへ帰るというけど、そのたんびに、ひと月ほどしたらこの家へ帰ってくるやないか。はじめから判ってンねやから、そんなシンドイことはやめときなはれ」

平太郎は、自称三尺三寸の自慢のヒゲを袋にしまうと、やおら妻の方へ向き直って、言葉をつづけた。

「今更あんたが、サトへ帰ったかて、わてがびっくりする訳けでもなし……あんさんのサトかてご両親はとうに亡うなって、いまは兄さんのお家やろ。帰ったところで気兼ねするだけやないか」

「今夜、家族会議をいたしますねン」

「なに？」

「家族会議だす」
「兄さんのお家でか？」
「いいえ、この家でだす」
「そんな話、わては聞いてまへんで。誰れが決めたんだす」
「子供四人と、番頭の吉兵衛はんと、それから私で六人」
「それはちょっとおかしい。戸主のわてをさし置いて、そんなことは出来まへん」
「出来ても出来いでも、そうするより他に仕様がない。みんながそない言うとります」
「吉兵衛を呼びなはれ」
「そこへ来とります」
平太郎が振り向くと、番頭の吉兵衛が、廊下の障子の陰から、そっと顔を突き出した。
「あんた、わてが呼ばん先きに来てたんやろ。なんの用や」
「へえ。只今、新聞の号外が入りましたので持って参じました」
恭々しく差し出した号外が、ふさの手を経て平太郎に渡るの待って、吉兵衛が言った。
「きのう、陛下がおかくれになりましたので、きょうから新しい年号が決まりました」
「さよか……新しい年号、昭和と言いますのンか。するときょうの家族会議は、昭和元年の十二月二十六日に開かれるちゅうことやな」
平太郎は号外の活字に目を通しながら、まるで他人ごとのように呟いた。
「暮れのせわしい最中に、ご苦労なこっちゃ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

そしてその夜――大槌家の奥座敷には、当主の平太郎を上座に、七人の顔が集まった。
「ほな、まァ、取り敢えず。お店をお預りしてます関係上、私から口火を切らして頂きます」
番頭の吉兵衛は書類を出すと、
「これがこの十年間の、お店の経理状態を一覧表にいたしましたもので……ごらんの通り、年々歳々利益が下がって、去年と今年は赤字になっとります」
窺うような目で、一座を見廻した。
「そら、当り前や。欧州戦争がすんでからざっと十年、世間一般が不況になっとりますねン」
平太郎が不興げに眉根に皺を寄せながらいうと、吉兵衛は「へえ」と叩頭して、
「けど、この靱の海産物問屋だけ見ましても、なかには群を抜いて成績のええ店もございますので……」
と、揉み手をしながら反論した。
「それは、経営の仕方によります。あんたの責任や。番頭のあんたがしっかりせんからや！」
平太郎が気短かに声を荒立てたとたん、
「そら、おかしいわ、お父うさん！」
末席から黄色い声が飛んだ。
大槌家の三女、使用人から小いとさんと呼ばれる末娘のみつ子である。十七才の女学生。
「吉兵衛はんは番頭さんで相当の責任はあるとしても、この家の最高の責任者はお父うさんやおまへんか」
正に、正論である。

だが、平太郎は動じない。彼は胸を反らすと大きく頷きながら言った。
「そうだす！　そやさかいにお父うさんは、吉兵衛を信用して、万事を任してますねンがな」
みつ子は納得のいかぬ顔で、口を尖らすと俯いた。
「ほな、こんどはわてから言わして頂きます」
ふさが、ちょっと居ずまいを正して、肩を張った。
「吉兵衛はんの話によりますと、お店のお金を旦さんが勝手にお持ち出しになるので、毎月帳尻が合わんのやそうですが、これはどう言うことで……」
ジロリ白い横目で睨まれて、平太郎が一瞬口ごもったすきに、長男の与一郎が、隣りの席から言葉を挟んだ。
「そら、お父うさん、おかしまっせ。お金儲けの方は番頭に任してるけど、使う方は自分で使う。それでは店を任したことにならんのと違いますか？」
「そういうお前は、毎日毎日何をして暮らしてなはんねン」
相手が与一郎ならば、平太郎の方にも言い分はいくらでもある。
「朝から晩まで芝居の楽屋に出入りをして……それで、芝居の台本は書けたンか。その、あんたが手に持ってる本、ちょっと見せてみなはれ」
「いや、これはぼくの先生が書きゃはった本だす」
「そやろ。あんたの頭では芝居の台本すら満足に書けん。まして、お店へ坐って、商売が出来る訳けがない。あんたは黙ってなはれ！」
「へ」

平太郎に極めつけられて、与一郎は簡単に退きさがった。
「ほな、旦さん……せめて株にお金をお使いになるだけは、おやめになって頂けまへんやろか」
吉兵衛が、平太郎の顔色を窺いながら、恐る恐る申し出た。
これは家族の者も、はじめて耳にする新事実であった。
「えッ？」
短く叫んで、ふさが思わずひと膝乗り出すのとほとんど同時に、次女のふさ枝が、まるで扉に手を挟まれでもしたような頓狂な声を張りあげた。
「お父うさん、株、してはりますのン？　あきまへん……私がお嫁に行くまでは、絶対死なんとって下さい！」
「なんやて？」
今度は逆に、平太郎が奇声を上げた。
「なんで株をやったら、わてが死なんならんのや」
「そうかて、中之島の公会堂を寄付しやはったお方、株で負けて、ピストル自殺しはったやおまへんか」
「あれは十年前の話や。わては負けたかて、死んだりせえへん」
「それやったら、余計始末が悪るますがな！」
はな枝は懸命に喰い下がった。彼女は結婚適齢期。いま大槌家に異変でも起これば、一番先きに波をかぶるのが自分であることを、直感的に悟っていたからだ。
否、それははな枝だけではない。もともと女性は直感力の鋭いものだ。

それまでは黙って、伏し目勝ちに坐っていた長女のたか子が、その時ふと顔をあげて、静かに口を開いた。
「お父うさん……もしも、吉兵衛はんの話がほんまやとしたら……どうかそれだけは、やめとくれやす。お願いだっさかい」
いかにももの柔らかな語調ではあるが、どこかに厳しい響きがあった。長女の貫禄とでも言うものだろうか。
こうなると平太郎は、まさに四面楚歌である。口々に八方から攻め立てられて……だがしかし、それで閉口する男ではなかった。怠け者は気が弱そうでいながら、得てしてそういう図太い神経を持ち合わせているものなのだ。
「そうか……」彼はひくく唸るような声で言うと、「家の主人に、店の金を使うなということは、つまり、隠居せえいうことやな?」
ギョロリとした目で、一同をゆっくり睨みつけた。
「けど、隠居は出来まへんで。仮りに百歩を譲って、わてが隠居をする気になっても、ほたら、いったいこの中で、誰れに家督を譲りますねン。長男の与一郎はこの通りの男やし……そや、ついでに言うとくけども、おふさ。与一郎がこんなあほんだらになったンは、あんたの躾が悪かったせいだっせ!」
平太郎の一喝を喰って、ふさの額にビリッと電流が走った。が、彼は敢えて見ぬ振りを装って言葉をつづけた。
「長男の他は女が三人。たか子は結婚したけれども、相手は外国へ飛び出して行く方が判らん。

次女のはな枝は、なんべん見合いをしても、いまだに相手が決まらん。三女のみつ子は、まだ女学生……吉兵衛はん、後嗣ぎがおりまへんわな」

「へえ……まことに、さようで……」

番頭の吉兵衛が、亀の子のように首を縮めて恐縮するのと、ふさが癇癪をたてて席を立つのが同時だった。

「わて、いまからサトへ帰って来ます！」

ふさは畳を蹴ると、荒々しく障子を開けて、座敷の外へ飛び出して行った。

師走の空っ風が、枯葉の小僧を追い立てて、街の辻々を駈けめぐる夜更けであった。

明けて、昭和二年の正月は、日本中が亡き大正天皇の喪に服して、家には松飾りもつけず、ひっそりと暮らした。

正月三日。

ふさが九条のサトから帰って来た。

彼女は茶の間の襖を開けて、「ヒヤァ」と息をのんだ。

見慣れない学生服の若者が、寝そべって雑誌を読んでいたからだ。

「あんさん、どなたはんだす？」

ふさがうわずった声で訊くと、若者も驚いたように起き上がり、四角に膝を揃えてお辞儀をした。

「ぼく、神田慎吾と申します。どうぞ宜しく」
ちょうど二階から、ふさの声をきいて階段を駆け降りて来た次女のはな枝の説明によると、彼は平太郎の遠縁で、平太郎の祖父の従兄弟の孫ということであった。
「わてが二十やさかい、慎吾さんはわてより三つ年上」
紹介が終わると、はな枝は慎吾に、
「さっき、お見せした二階のお部屋、掃除しましたさかい、どうぞ」
と、母親のふさでさえ、これまで一度も耳にしたことのないような、優しい声で言った。
「そうですか。じゃ、ご厄介になります。失礼」
こちらはまた、ひどく打切棒に、軽く一礼を残すと、さっさと部屋を出て行った。
「遠縁は判ったけど、なんだすねン」
「お母ァさんの留守中に、お父さんが引き受けはりましてン。東京の大学からこっちの大学へ、都合で移って来た、言うたはりますねン」
「なんで？」
「東京の大学、落第しやはったンかも知れまへんな」
「うちを下宿にしやはるのンか。いつまで？」
「卒業までやさかい、二、三年いたはるのンと違いますか」
はな枝が、いかにも浮き浮きした表情で答えるのとは反対に、ふさは終始、ニガ虫を噛みつぶしたような顔でき終わると、
「サトへ帰って来るたンびに、ろくなことあれへん」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com